

奈良・県立明日香養護学校遺跡



(吉野山)

7 遺跡の年代 七世紀後半
 8 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 県立明日香養護学校において、校庭の一角に給食室用ボイラーノ
 オイルタンクを埋設するため掘削工事を実施していたところ、一九
 七二年一二月六日に、土器
 類や若干の木片とともに木
 簡(1)が出土した。学校側か
 らの連絡を受けて、当時、
 横原考古学研究所に在籍し
 ておられた白石太一郎氏と、
 現所員の前園実知雄氏が現
 地に赴いて、土層観察を行
 なった。その結果、もとの

- | | |
|---------|------------------|
| 1 所在地 | 奈良県高市郡明日香村川原・小山田 |
| 2 調査期間 | 一九七二年（昭47）二月 |
| 3 発掘機関 | 奈良県立橿原考古学研究所 |
| 4 調査担当者 | 白石太一郎・前園実知雄 |
| 5 遺跡の種類 | 不明 |
| 6 遺跡の年代 | 七世紀後半 |

水田床土と判断された黄褐色粘土質土層の下は三層に分かれ、その
 最下層である第五層はやや砂っぽく少量の有機物質を含み、木簡、
 土師器・須恵器、加工痕のある木片、種子・樹皮などの遺物は、全
 てこの第五層から出土したものと判断された。土器は藤原宮跡出土
 のものに類似する。養護学校の校舎が建っている平坦な尾根上に、
 何らかの遺構を伴う遺跡があり、その東の谷底の低湿地状の所に、
 木簡などの遺物が堆積したものと考えられる。土層観察後、残余の
 あげ土から、木簡(2)が採取されている。

木簡(1)(2)については、岸俊男氏がとられた木簡調書が残っており、
 それをも参考にしながら、今回新たに木簡そのものについて再検討
 し、糸文を定めた。木簡(2)はこれまで未報告だったものである。

8 木簡の糸文・内容

(1) 「~旦波国多貴評草上」

・「~里漢人マ佐知目」

178×28×4 032

(2)
 •「~白糸×
 •「~大遣×

(41)×15×2 039

(1)は完全な形で残った貢進物付札で、表と裏面に統けて國・評・
 里名と貢進者を記すが、貢進年月日や税目・品名はみえない。藤原
 宮跡出土木簡には、こうした記載形式をとる事例がいくつかみえて

いる。『和名抄』に丹波国多紀郡草上郷がみえ、高山寺本では「久左乃加三」の訓を付している。兵庫県多紀郡篠山町に、篠山川に沿つて草ノ上の集落があり、すぐ上流域に名神大社の櫛石窓神社が鎮座している。

(2)は上端部のみが残つており、表面には鉄粉のような鋳が付着している。木簡が廃棄され、土中に堆積していた際に付いたものだろう。貢進物付札ではなく、白糸につけられた荷札の断片と思われる。

(1)は評制が施行されていた時期の貢進物付札であるが、なぜ藤原京城から南へ遠く離れた場所（藤原京の南京極大路である阿倍・山田道から、南へほぼ一・一km離っている）から出土したのか、問題を残している。周辺地域の発掘調査を俟つて判断すべきではあるが、遺跡の

意すべきかと思われる。菖蒲池古墳があり、またすぐ南に天武陵を望む事実に留意すべきかと思われる。菖蒲池古墳の年代については大きく意見が分かれているが、大内陵よりは古くなるようである。朱鳥元年(六八六)九月に崩御した天武天皇は持統二年(六八八)一月に大内陵に埋葬されるが、大内陵の造営は持統六年六月ごろまで継続した。臆測にすぎると、ここでは木簡出土地の周辺に大内陵造営のための施設が存在した可能性を指摘しておきたい。

9 関係文献

白石太一郎・前園実知雄「明日香養護学校校庭出土の木簡」(権原考古学研究所彙報『青陵』二二号 一九七三年)

(和田 萃)

大阪・大坂城跡 (1)

所在地 大阪市中央区大手前一丁目

2 調査期間 一九五三年(昭28)一〇月~(終了年月不明)

3 発掘機関 大阪市立大学大阪城址研究会

4 調査担当者 山根徳太郎

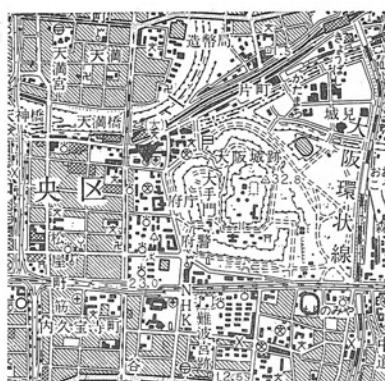
5 遺跡の種類 城郭跡

6 遺跡の年代 安土桃山時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪合同庁舎第一号館の基礎掘削時に調査が行なわれている。

木簡は現在行方がわからぬので、山根徳太郎氏の報告(大阪市立大学大阪城址研究会『大阪城の研究』研究豫察報告第武一九五四年)によつて記述する。



(大阪東北部)

代の遺物(祝部土器)包含層、
窪地埋土層がみられた。窪
地埋土層からは漆椀、宋錢